

哲學研究

第三百七號

第二十六卷
第九冊

世界知の限界と自由

カール・ヤスパース

一 近代科學

近代科學は世界内の事物の認識を非常な廣範圍に互つて獲得し、この認識に基づいて巨大な技術的能力に到達した。認識と技能とは、これを以前の時代例へば十七世紀以前の眼で視れば、事實と思へぬ程に大規模である。嘗て不可能と考へられた多くのことが現實となつた、すなはち最後には、空を飛ぶことや電波によつて全地球上到る處に報導を傳へることが出来るまでになつたのである。しかしこの科學は人を誤る結果をも生んだ。それは、世界が全體としてまたその原理に於て、認識可能である、否既に認識されて了つてゐる、と認められるに至つたことである。いまやその認識を基として人類の爲に、安寧と幸福との永續的狀態を可能にする正しい世界組織を樹立するには、たゞ善き意志さへあれば足りる、といふ意見が生じたのである。かくして過去數世紀の間に、一つの新たな現象が歴史上に

現はれた。即ち科學への迷信である。この迷信は科學の爲し得ぬことを期待する。それは、いはゆる事物の科學的全體觀なるものを決定的な認識であると考へる。それは、研究の結果をば、その結果が方法的に如何にして獲得されるかを知らずまた科學の結果がその時々にもつ妥當性の限界をも知ることなく、無批判に受け納れる。それは、すべての眞理及びすべての現實を、我等の悟性が意の儘になし得るものであると解する。それは、科學に絶對の信頼を寄せ、専門家の下す公式の判定に於て實現される科學の權威には、無條件に服従するのである。しかしこのやうな科學への迷信が遂にその蒙を啓かれるに至つたとき、此度はその反動として、科學への非難が生れ、感情・本能・衝動への訴へが現はれた。こゝに於てすべての禍は近代科學の發達の所爲とされる。科學への迷信が不可能事を期待したのであつた以上、かやうな幻滅は避けられない。正しい組織の試みも成功せず、最善の計畫も挫折し、人間的な生活狀態の急激な破壊が現はれる——そして究極の進歩に對する期待が存してゐただけに、かゝる破壊の甚だしさは益々堪へがたく感ぜられるのである。醫者が、その技能の向上にも拘らず、個々の人間の幸福のためにすべての病を癒すことも死を阻止することも出来ない、といふことこそ、萬事を象徴してゐる。人間はまたしても己れの限界につきあたるのである。

かゝる狀況に於て何よりも重要なことは、眞の科學即ち知り得るところを明かに知るとともにまた自らの限界を明確に自覺してゐる眞の科學を、我がものとして獲得することである。たゞかくしてのみ、科學への迷信と科學の蔑視といふ二重の錯誤を避けることが出来るのである。かやうにして生じた大きな問題領域、即ち現代人の精神的運命を左右する問題の一つに關して、考へるところを僅かばかりこゝにのべようと思ふ。

二 世界知に於ける限界

研究に於て我々は世界が認識可能であるといふ前提を置いてゐる。この前提なしには如何なる研究も無意義だからである。けれどもこの前提は二様の意味を有し得る。すなはち、第一には世界内の對象が認識可能であるとの前提、第二には世界全體が認識可能であるとの前提。第一の前提のみが正しい。そして實際、世界内の事物の認識が今後如何ほど進歩するであらうかこれを知ることが出来ぬのである。これに反し第二の前提は正しくない。それが誤謬である證據には、内容的研究に何の制限をも加へずしてしかも知識一般の限界を示すところの困難が存するのである。すなはち、世界全體を唯一つの完結したるものとして認識することは出来ぬ、否それどころか、矛盾なしに考へられ経験され得るといふ意味では世界は我々にとつて一般に存在しない、といふやうな困難である。かやうな限界を明かにするには、世界全體が認識可能だとする誤まつた前提が、研究の事實に當つて挫折するのを見ればよいのである。ところでこの前提の採る形態は就中次の如きものである。

(一) 「世界は、一つの完結した全體として我々の對象となる。」この前提は、世界をば世界像の中に捕捉することを意義ある課題と考へ、唯一の眞なる世界像が到達可能であると考へる。しかしこの前提は、世界全體が我々の對象となることによつて必ず分裂する、といふ事實に逢うて、挫折するのである。

(二) 全體としての世界についての陳述は、二律背反、即ち兩者とも等しく證明可能とみえる二つの相矛盾する主張、に陥る。例へばカントは、世界が空間的に無限とも有限とも、また時間的に始め有りと無しとも、考へ得ると

同時にまた考へ得ないことを示した。ところで一つの對象が、それについて何事かを陳述するに當り、相矛盾する二つの命題を生むといふやうなものであるならば、そのことによつてその對象はもはや對象たることをやめたのである。それは、自己矛盾によつて、對象としては消滅したのである。

(b) 世界は對象でなくて、カントの意味に於て理念である。この命題が何を意味するかは、研究といふことの意義を考へれば明かになるであらう。

研究は世界内の事物に向ふ。それは、世界の内にとゞまる。世界はその對象のすべてを包み行く、どこまでも果てなき存在である。研究は世界そのものには達しない。ところではかやうな世界内の事物の探究として、研究がその意義を保持し得るのは、それに聯關と目標とを興へる理念が、常にそれを導いてゐるが故にほかならない。事實、研究がその對象となる事物の體系的統一を要求するに對し、それに應ずる事態——例へば、生物のすべての形態が系統的秩序をもつこと、或は物體界のあらゆる特質相互の聯關が物質に於て與へられること——を、世界の方から、研究に對していはゞ提供して呉れるのである。もし研究に携はる意識が理念を見失ふならば、すべての認識内容は限りなく分裂し、一つの聯關といふ意義を有せぬ、單に正しいといふだけの斷片的知識に分散してしまはねばならないのである。しかしながら、このやうな研究の諸理念も尙、世界内での理念である。それらが如何なる程度にまで現實的であるかを教へ得るものは、常に實驗及び事實的聯關の經驗だけである。然るに世界の理念、聯關をもち秩序をもつ全體としての統一的世界の理念、すべての理念を統べるこの理念は、世界内に現はれる一切のもののためならぬ方向に關係を求めること、研究の對象とされることによつて起る世界の不斷の分裂を阻止すること、このことのみを自ら

の課題としてゐるのである。そして事實上世界内の事物の間には諸、の關係が見られるのである。しかしそれらの關係が如何なる種類如何なる意義のものであるかは、どこまでも實際の探究によつて明かにせらるべきことである。世界の統一とは、どこまでも一つの問ひであり、研究がその進行中時に應じ、諸、の理念を通じて、それに答へを興へるのである。そしてこれら理念こそ研究を導くものであり、またこれら理念に應じて世界の方から提示される客觀的事態をば、研究がその獲得せる認識の體系的聯關に於て見出し來つたのである。

それ故世界が理念であるのは、それが世界内の絶えざる前進に對する課題であつて、完結せる全體ではないからである。探究し得べき存在はすべてたゞ世界の内にのみ現はれる。世界全體は決して對象として我々に對することがない。對象とは世界の内なる認識可能な世界存在なのである。

(c) 世界は無^限である。しかし有限者のみ我等の認識の對象たることが出来るのである。無限者は、たゞ間接に、進行の規則を通じて捉へられ得るのみであつて、直接に全體として捉へられるものではない。無限なるものは對象とはならぬのである。

尤も無限者の直接的知識が、我々の超越のための乗物となることがあるかも知れぬ。しかしその場合思想は認識可能なるものの範圍を超えてしまふのである。或はまた、無限者は、有限者であるかの如くに誤つて對象とされるかも知れぬ。がその時は逆説や二律背反が生ずるのである。

(二) 「世界は、それ自身に於て、連續的^な、完結した^{事象の}秩序である。」この前提は、世界存在の分裂態に達うて否定される。

(a) 現實は分裂してゐる。無生物界の物理學的事象、生物學的事象、意識、精神、は、その後なるものが先なるものの現實性に拘束されるけれどもその逆ではないところの、四つの現實態である。これらは飛躍によつて分たれ、非連続的に、並び存してゐる。そのいづれも他者から導き出されず、先行者からの發展として理解されない。以前には人々は認識の缺如の爲、たゞ大凡に言ひつつ、いはゆる推移なるものによつて分裂を蔽ひかくしてゐたが、今日では經驗的知識が益、明瞭となつて、飛躍をばいよいよ決定的たらしめ、それを以前よりも根本的に認識せしめるに至つた。連續の原理は世界認識に於て飛躍に出逢うて挫折するのである。

(b) 方法は分裂してゐる。各の方法に對して現はれるものは一つの世界存在であつて世界ではなく、一つの特殊者であつて總體ではなく、世界の一つの見通しであつて世界そのものではない。

例へば、自然の探究はその方法の上からいつて、自然の事象の不變の諸法則、その不變の諸力、つまりその存在の一般者に向ふか、或はまた一回限りに生起する現實そのもの——例へば地球が現にあるが如くに成つた次第や自然史の諸時代の繼起——を旨指すか、いづれかであり得る。私が硫黃の化學的性質やそれが元素の週期表に於て占める位置やその様々な化合物を探究すると、シリール島に於て塊狀の硫黃が堆積して存するといふことに注目するのは、根本的に異なる事柄である。後の事實は、最初の途に用ゐられる認識手段を以ては理解出来ないのである。かくして例へば地質學に於て根本的な二つの見方が生ずる。すなはち一は、昔も今も常に同じ條件が存したと前提する研究即ち、すべての過去の出來事は、我等が今日尙その働きつゝあるのを見るところの力や法則によつて理解される、と前提する研究であり、他は、この前提を絕對的に妥當するとは信ぜず、時間的繼起に於ける一回限りの事象を求

め、自然の、また地球の、また生命の、現實の歴史を求め研究である。この二つの研究方向は、合一して唯一つの全體をなすことあり得ない。一般化する自然研究者は、歴史的考察をば、それが一般的認識の單なる應用以外の何もかを目指す限り、空想と見做すかどうでもよい事柄の確定と見做すであらう。また歴史的な自然研究者は、一般化的認識に於て、何か一面的なものの表面的なものを認めるであらう。この兩研究者に對して世界存在の包括者の客觀化に於ける二つの相が示されてゐる、けれどもいづれの研究者にも、全體としての世界は示されてゐないのである。

どこでもこの通りなのである。多くの方法は分裂し、どこまで行つても一つの包括的な普遍的認識方法に歸一することがない。

就中、到るところでものを區別し飛躍を見出すか、或は到るところで和解につとめ統一を求めるか、の二つの相反する途は、いづれも同等の權利を有する。一方が前景に出て他に譲らぬ場合にのみ、他方から誤謬として攻撃されるのである。けれども兩者を調和的に矛盾なしに一つの全體たらしめる方法はない。それらは互に對立し、互に他に轉化し、分裂せる世界の中でどこまでも分裂したるまゝである。まことにこの世界では、統一すらも分裂と伴つてのみ現はれるのである。

(c) それ故認識對象としての世界存在は決して全體としての世界存在ではない。我々の研究し得る存在は決して世界自身ではない。私は世界を研究することによつて、飛躍を以て相互に分たれた諸、の現實態に世界を分裂せしめるのである。私は世界のこの分裂を、世界が研究可能の領域へ現象することによつて有つところの根本特徴として經

驗しつゝ、どこまでも、統一的世界の理念に導かれて、分裂した一切のものをその相互關係に於て把握しようとするけれども、いつか再び統一的世界に到達するといふことはないのである。

(三) 「世界はその原理に於て理解可能である。」この前提は、あらゆる理解の試みが一々不合理に陥るといふことによつて、否定される。

こゝに私は例として、生物の發生と、生命の地質學的世代の發生と、人間の發生とに對する三つの問題を選ぶことにする。

(a) 生命の由來は、自然的方法では、唯二つの途によつてしか理解されない。すなはち、生命が無生物から發生したか、或は生命の胚種が、宇宙空間から、極度の寒冷と極度の暑熱とを凌いで地球に飛來したか、いづれかである。第一の場合には、生命は、繰返して幾度も、否おそらく何時でも、今のところ未だ知られてゐない一定の條件の下に、發生し得るであらう。第二の場合には、生命は今まで常に存在したのである、生命は世界と齡を同じくし、特別な由來といふものを有たないのである。

さてこの二つの可能性は二つながら全く空想的な見解であつて、兩者とも可能でなくてむしろ不可能であると主張してもよい位である。無生物からの發生といふことは、生命の認識が進歩するにつれて、いよいよ蓋然性少なくなつて行く。おそらくその不可能の證明をすら爲し得るであらう。すなはち、各々の生きた有機體に存する目的手段關係の無限なることを理由にしてか、或はまた生命發生の働きにとつて前提されねばならぬ多くの偶然が同時に會合することは極めて蓋然性乏しく事實上不可能といつてよいことを理由にして、である。また、生命の起原が地球に飛來

した胚種にあるといふことも、宇宙の非常な寒冷の故に、また大なる距離——それは胚種が幾時代も生命を維持することを要求し従つて我々に知られてゐるすべての生命種には及びもつかぬ距離である——の故に、極めて蓋然性之しい事柄である。またたとへさうだとしても、それで生命の由來が理解されたのではなく、生命と無生物とを分つ不可解の深淵が世界根據そのものに移されるだけであらう。

かやうな不可解事が現はれた時、人は屢、單なる言ひまはしだけで濟まさうとした(例へば、「つまり推移なのである」とか、「段々に無生物から生物が生れ出る」とか、「いつかはきつと分るだらう」とか)。或はまた人はこの理解不可能のことに對して外ならぬ理解可能の前提を以て立ち向つた(すなはち「こゝに有限数の可能性、我々の場合には二つの可能性の、どれかを選ぶことが出来る。ところで、物事が原理的に不可解だといふ不合理な意見を採らうとせぬ限り、比較して見て蓋然性の最も大きいどれかの可能性を承認せねばなるまい」など)。或はまた人は——眞面目にか冗談にか——神話めいた空想的な假説を立てるが、それは事を理解させるのでなくむしろその不可解なるをば間接に際立たせるのである。

かくて生命の由來の問題に對し、また生物と無生物との間に存する飛躍に對して、途方に暮れた揚句に、次のやうな説が考へ出された。それによれば世界存在はそれ自體に於て生命である。従つて生命の發生が説明を要することなどではなく、無生物の發生こそ説明を要するのである。すべての無生物、物質、無生の土壤、宇宙は、生命の排泄物または死骸なのである。

けれどもかやうな空想的な考へによつては、それ自身に於て充實せる獨自な存在なる無生物が、誤まつて死物に變

せられてゐるのである。それ自身に於て神祕に満ちた包括者としての世界存在は、上のやうな説では、物理學的並に化學的に認識せられる死せる機械組織に變質させられてゐるのである。

同様にして他の二つの問題についても異様な考へ——哲學者達は時にこれを眞面目な眞實なものとして考へた——が存し、問題の不可解を表示してゐる。

(b) 植物界と動物界との大なる典型的なる諸形態は地球上に於て生命の世代として次々に出現する。それらは化石をもととして再構成し得るのである。ところで問題はそれら生命形態の一が他から次々に如何にして發生したか、である。それらの嚮起は事象の一般的法則によつては理解し得ない。中間者或は推移態が全く存しないか、或はたとへ存してもその中間者としての性格は、時間的發展の意味では(無時間的なそれ自ら纏まりを有つた形態の多様の意味ではない)疑はしいものであるか、である。それ故に次のいづれかのことが眞であらう——と空想的見解がいふ——すなはち、神は生命を度々の大變動の後幾度も新たに創造したのであるか、或は神は六千年前に世界を創造し、しかもその際過去をもその化石とともに創造し、従つて化石は事實上一度も生きてゐたことがなく初めより單なる過去として創造されたのであるか。

然しながら、創造といふ考へは、これを一度限りと考へようと幾度も起つたと考へようと、如何なる知見をも示さない。しかも、化石の形で歴然と遺された前代の生命の遺物をば、實際の生物から生じたものでなく初めより生命なき過去として現はれたものであると解することは、目のあたりに見られるところに矛盾し、また我々が環境に於て適切に行動し得るために常に不可欠な、環境理解の仕方にも矛盾するのである。

(c) 人間は何に由來するか。人間は猿に似た祖先から進化し來つたに相違ない、と人はいふ。けれども、人間及び人間に似てゐるといはれる生物の、發掘された遺物を手がかりにして、この進化を具體的に表象しようとしても、あらゆる動物存在と人間存在との間に、生理的事實にまで及んで根本的原理的に存在する深い相違を、如何に處置するかといふ問題に當面して、もはや進めなくなるのである。そこで次のやうな空想的な意見が敢て主張される。人間は事物の初め以來ずっと存在してゐた。地質時代の諸、の生命形態は、いはゞ人間存在の次々に變る衣裳となつたのである。人間は、魚類や爬蟲類や猿類に外見上似た形を採りはしたが、本質上常に人間であつてこれら動物種のいづれでも決してなかつた。何故ならば、人間は常にたゞ人間のみの子孫なのであるから。人間は事物の原初から生じてゐる。それのみでない。人間が猿の子孫ではなく、猿こそ、墮落した人間として、人間の子孫なのである。否さらに、すべての生命は人間生成といふ唯一つの樹から脫落した生命であり、それはやはり生命だと言ひ得るだけのものであつて、器官の特殊化の行きつまりに陥つて居り、より高きものを自身の中から生ぜしめることは出來ず、自らの本質をばより高き人間存在から導き出してゐるのである。人間は時を貫いて生き、その現はれの各段階に於て、退化や制限や消耗によつて彼自身から生じ得る生命形態を、自己の周圍に遺して行く。おそらく我々は今日、最大の規模に於て、人間の技術化によつて、一動物種に屬する單なる生命としての一つの新たな變種を、人間から生ぜしめんとしてゐるのであらう。そしてさうなれば問題は、新たな可能性をもつ本來的なる人間存在が——他日、自らは少數であつても自身も周囲に恰も昆虫然たる多數の人間蟻を見るところの人間存在たらんが爲に——この大規模な過程の中にあつて、自己の未來への狭き活路を見出すかどうか、見出すとすれば如何なる形態をとつてであるか、といふことであ

らう。

けれどもこの空想的な説は、我々が目のあたりにみると全く反對に、人間を除く地球上の全生命を一つの墮落の産物に貶してしまふ。この説は生命から、あらゆる點でそれに固有な完備と完成とを奪つてしまひ、普遍的な、そして明白なものと誤り信ぜられてゐる過程、即ち退化的發展の過程を主張するのである。けれども私は猿が人間から生れたといふことを、人間が猿から生れたといふことよりも一層よく理解出来るわけではないのである。

上の三つの例をのべたのは、我々が世界に於て出會ふところの不可解を示すためであつた。それはかりそめの不可解事ではなく、原理上理解不可能のことなのである。

對象となるところのものは、その限りに於て、理解可能である。一つの理念の場の内部で、因果の聯關に於て乃至は體系的秩序によつて把握されるものは、その限りに於て、理解可能である。けれども理念は、現實の世界に於ては、全體としてではなく唯その時々々の範圍内でのみ、客觀的なのである。理念は認識に於て或點で行きつまる。それは認識された世界が分裂するからである。

そこで上のやうな不可解に面して最後には空想的見解がたはむれに試みられるとすればそれはさういふ見解によつて事の理解不可能なるを顯著に示さうとするだけのことである。若干の不合理な可能性が存ししかもその外にはもはや可能性がないと思はれるやうな場合に、かの理解可能の前提が、一途に理解を目指すあまり、強制的にそのいづれか一つを選ばせようとするならば、それは人を迷はすことになる。むしろ不可解性の經驗そのものこそ、認識の深い苦痛であるとともに、また假借なき認識意志によつてのみ獲得される貴い寶なのである。眞正の認識を獲得せんが爲

には、不可解なるものをば、詐ることなく直視すべきである。また、認識は常に特殊である故に、それを絶対化したりその立入り得ぬ領域に擴張したりしてはならぬのである。

(四) 「我々の認識は認識された事象と合致する。」この前提は、獲得された認識のすべてが我々にとつては現象的對象の認識の一樣態にすぎず、決して存在の包括者自體即ち全體を示さない、といふ事實に逢うて挫折する。我々の認識する一切のものは、認識されることによつて、恰も包括者の骸となるかの如くである。たゞ認識の運動に於てのみ、そしてあらゆる限定されたる、従つてその限りに於て固定せる認識を超越することによつてのみ、我々は認識を通じて包括者に接近する。しかしそれを直接に把握することはないのである。

そのすべての形態に於て世界認識の限界が示すところは同一である。すなはち、世界の包括者は、對象として探究し得るものの總體を以ては盡くされない、といふことである。

三 包括者の存在

我々の論究は最後に「包括者」(das Umgriffende) の概念に達した。この概念は周知のものでも自明のものでもない。けれどもそれはあらゆる哲學的思索にとつて本質的なる概念である。その意味はおそらく次のやうにして手短かに明かにすることが出来るであらう。

私の對象となるすべてのものは、いはば存在の暗い根柢から私の方へ歩み寄つて來るのである。各々の對象は一つの限定された存在であり、主觀客觀の分裂態に於て私に對するのであり、決して全部ではなく、決して全體ではな

い。對象的に知られた存在のいづれも、存在そのものではない。

しかし諸々の對象の總體が、存在の全體を形づくるのではないのか。私にとつて對象として直觀し思惟し得るものはいづれも、その對象を容れてゐる事物の總體によつて圍まれてゐる。このすべての特殊者個別者を包含するところのものを我々は地平圏と名付ける。それは自ら我等の眼前に姿を現はしてゐるものである。しかしながらこの地平圏も尙存在の包括者そのものではない。恰も空間的世界に於て我々が地平圏に向うて進みながら決してそれに到達することなく却つて地平圏の方が我々と共に進み、その都度すべてを圍むものとして常に新たに更新されると同様に、我々は對象的研究に於てその時々々の全體に向ふけれどもさういふ全體は、結局は全體的本來的なる存在たること決してなくて、新たな場面をひらくために破られねばならぬものなのである。たゞすべての地平圏が合一して一つの完結せる全體となる場合にのみ——假定により地平圏の數は有限である故——この地平圏のすべてを経めぐる運動によつて、我々は統一的完結的な存在に到達することになるでもあらう。けれども存在は我々にとつて非完結的である。それは我々をあらゆる方向に果てしなく導き行くのである。

さてこのことを對象的認識の運動に於て自覺的に經驗する時、我々が問ひ求めるものは、存在——その現象は對象としてまた地平圏として我々に興へられすべて我等に對して明かに示されるにも拘らず、それ自體としては姿を現はすことなき、存在——である。この存在即ち、それ自身對象でもなくまた直觀的に捉へ得る地平圏でもなく、そこからすべての對象並に地平圏が我々に對して現はれ來るところの存在を、我々は包括者と名付ける。それ故包括者は常に唯その存在を告知するにとゞまるものであり、それ自體は我々に現はれることなく、しかもその中に他のすべての

ものが現はれるのである。

我々は、あらゆる限定された存在を超えて、我等がその中にあり我等自身がそれであるところの包括者にまで考へいたることにより、上の哲學的根本思想を實現する。それは、我等を拘束するあらゆる限定された存在から、再び我々を解放するが故に、いはゞ我々を轉回させるところの思想である。この思想を通じて我々は、思惟によつて自由を覺知するのである。

四 世界の無基底性と人間の自由

もし世界が、世界存在として私に認識される限りに於て、自己完結的な全體を成し、それ自身によつて理解し得、自己の中に矛盾をもたず、調和的な全體過程であり、一義的因果聯關の中に實現された一貫せる目的性であるならば、このやうな世界こそ、存在そのものであり、その他には何も存しないであらう。世界は神と一つになるであらう。神は世界のこの全體にほかならないであらう。

我々の思惟には、世界理解の各段階に於て、全體として觀た世界をば、それが直ちに存在自體であるかの如くに考へようとする、抜き難い傾向が存する。世界存在の原理は、原子、物質、エネルギーとして、生命として、また世界過程として、對象的に我々に示され、その結果、存在するすべてのもの、従つて我々自身も亦、知の對象となれる世界存在の全體からして導き出されることになる。

けれども批判的認識は、次第に明晰となり行くとともに、次のことを明かに悟らざるを得ない、すなはち、そのや

うな認識された世界存在は、もはやこれで存在自體に達したのだといふ意識を以て私があるの上に身を托するに足る基底とは、決してならぬ、といふことである。どのやうな仕方でもそれを試みるにしても、結局、一定の、對象化された、特殊な範疇に屬するところの存在から、全存在を導き出さうといふ誤謬の固執に陥るのであり、さういふ絶對化によつて我々は、認識を得ずしてたゞ様々な表象の中に迷ひ入るばかりである。

それ故に、すべての對象的なる即ち認識可能なる存在を残りなく宙に浮ばせる、といふ哲學の措置が必要となるのである。世界認識の眞理に達するには、世界存在の無基底性が我々に開示されねばならぬ。けれども個別的認識の明晰性と相伴ふことによつて全體の無基底性は、あらゆる現象を擔ふ世界存在の包括者への指示となるのである。世界存在の包括者は、自らあらゆる認識可能性を超えてゐて、しかも認識に對して現象の形で無實際にあらはれる。この故に、認識された事象は、超越者への指示となるのである。世界の誤まれる絶對化の廢棄が世界存在の包括者を開示するといふ場合、それは、事物の現實存在についての懷疑を意味するのではなく、かゝる現實の本性並にその認識の有する意義についての明晰な知見を意味するのである。

この知見の結果として得られる存在意識は、同時に我々の自由を感知せしめる。その自由とは、認識可能者の全體域に於ける本來的なる存在に對して、我々を開放するものなのである。我々は世界に對して自由となり、世界に於ける我々自身に對して自由となり、超越者との關係に於ける我々自身に對して自由となる。

(一) 我々は世界に對して自由となる。世界存在は、包括者の中に根柢を有たずしては、無基底である。我々はすべての固い基底を突き破ることによつて自由の境に達し、しかしてこの自由を通じて世界存在の包括者が我等に示現す

るのである。何となれば、我々は、あらゆる限定された現象を通りぬけ、それらの特殊性相對性を洞見しつゝ、世界存在の諸理念に導かれて、この包括者の領域のいよいよ擴がり行く中へと進み入るのだからである。こゝに於て我々は、世界の包括者を、安定の破壊者として並に實質の附與者として、經驗する。それは世界に於ける我等の絶えざる運動の根據であり、従つて、その時々々に認識された世界存在を通じて、世界の包括者は、單に感知されるばかりでなく、さらに——對象的に認識はされぬが——いよいよ透明になり行くのである。

(二) 我々は世界に於ける我々自身に對して自由となる。我々は自らの世界存在を貫いて、我々がそれであるところの包括者として我々自らの内に現前してゐる根柢にまで突き進む。それは我々の生成の根源であり、現象として展開されぬ以前の胚種の如きものである。我等の内には、世界の創造に對する定かならぬ關知ともいふべきものが宿つてゐるのである。我々がそれであるところのこの包括者は、世界の包括者の内に於て生動し、我々の氣分として、即ち我等をひきつけ或はおしやり或は充たすものとして、現はれる。そしてこれあるが故に我々は、もはや對象的なるもの——これは常に有限且つ目的的である——の中に沈淪するを許されぬのである。

(三) 我々は超越者との關係に於ける我々自身に對して自由となる。世界存在を宙に浮ばせることの一つの結果として、我々は自らの中に、たとへ世界を離れても尙自己を質存者として知るところの根柢があることを、悟るにいたる。我々は、世界を通じてにせよまた超越者への直接の關係に於てにせよ、超越者に向つて自由となる。勿論この根柢は、それが世界現象に於ける具體化をもたぬ場合、即ち、自我存在の對象と現象とが消滅して、紛ふ方なき、超越者に直面せる自己存在、のみが残るといふやうな場合には、我々にとつてどこまでも展開されぬ儘であらう。或はまた

我々は孤獨な觀想に於ける一般的なる確證によつて、この現實に、言はずと抽象的に觸れるのみであらう。けれども、ともかくも、人間にとつては、超越者の存在の内に、最後の隠れ家が殘されてゐるのである。——尤もこの場合も、現世に生きる限り、超越者の存在の確實性のかやうな經驗から、世界を通じての包括者の開示に對しては、如何なる結果が生ずるか、を檢べて見るといふ課題が、依然として殘されるであらうが。

五 科學と哲學

我々自身の存在意識を世界知によつて自ら隠蔽することなきためには、我々は世界認識の限界を明瞭に意識せねばならぬ。常に有限で相對的な可能的認識を絕對化して存在自體についての知識となすところの似而非知識は、第一には眞でなく、第二には、我等がそれでありまたそれから生れる包括者の根柢から發するところの衝動をば萎えさせてしまふ。これに反して現象的世界存在の無基底性の意識は、自由の自覺に對して場所を開くのである。

照明せられた無知は生活の眞理への途となる。すなはち我々は、有限な世界知をばより高き存在知と同視するところの虚偽の知識によつて妨げられることなく、根柢より發するひそかなる衝動に、また存在そのものの言葉に、耳を傾けることが出来る。我々は一層決然と、包括者から出て包括者へと生き且つ働くことが出来る。けれどもこのことは、我等の悟性の目的的意欲の能くするところではなく、却つてそのやうな目的を目指しての行爲を停止することによつて、即ち常に注意しつゝ自らは何ものをも意欲せぬところの内的行爲によつて、力づけられるのである。この内的行爲こそ我々の魂を清めるものであり、そして清められた魂にのみ、存在の實質より發して第一義を目指しつゝ生

きる自由が、賦與せられるのである。

照明せられた無知は更にまた、本來的なる知識への途、即ち有限物の知識を通じて包括者の知識にいたる途となる。私が存在の覺知に達するのは、何も知らぬことによつて即ち空虚な無知によつてではなく、知り得べきものをきはめてその限界に行き當るといふことによつてである。最も明かな知に於てはじめて、充實したる無知が本來的なる存在意識を現前せしめるのである。

それ故我々の結論は次の如くである。我々は自らの生活を到る處で計畫的行動によつてはじめて合目的に展開してゐるのであるけれども、しかし我々が世界を全體として認識し得ぬからには、また世界を全體として計畫的に組織することも出来ない。我々のすべての認識並びにすべての計畫的行動は世界内の有限物に局限せられ、絶えずすべてを包括する者の手に委ねられてゐる。そしてすべての認識や行動はこの包括者から現はれ出で、またこの包括者へ我々自身とともに還り行くのである。けれども、世界内でのこの有限なる認識及び有限なる行爲自身、包括者——それは知の對象とならずまた目的として意欲され得ない——に擔はれてゐる限りに於てのみ、實質的であることが出来るのである。さてこのことに對應して我等の思惟は兩極性を有し、それが科學と哲學との區別並びに結合に於て現はれてゐる。

科學は認識可能な有限な現象存在に向ふ。哲學は包括者に向ふ。科學の根本概念は、對象的なるもの一般と時間空間の實在性との諸範疇である。哲學の根本概念は、自由である。科學の意義は事物を認識することであり、哲學の意義は思惟によつて自己と成ることである。科學の眞理はすべての人によつて同様に理解され得るもの、等しく眞と認

められた等しく適用され得るものである。哲學の眞理は、一般的思惟の形式をとつてゐるにも拘らず歴史的であり、人格的に獲得され實現さるべきものである（科學の一般者は對象的に直観によつて充實されるに對し、哲學的思想の一般者は、いはゞ我々の魂の一方の翼であつて、これを以て思惟の飛翔を實現するには、もう一方の翼——即ち我々の常に歴史的なる實存——が共に羽蔽かねばならないのである）。科學の眞理は不可抗的で普遍安當的であるが、その時々々の見地と方法とに相對的である。哲學の眞理は喚起（Appell）と照明（Erhellung）であり、その實質に於て常に無制約的であるが、その代り普遍安當的ではない。科學の眞理は了解と學習とによつて獲得出來、その際すべての人は他の人によつて代理され得る。といふのはその眞理は誰がそれを考へようとも同一のものだからである。それ故にまたこの眞理は人格的意義を有せず、限界狀況が私を揺り動かすとき、本質的な點で私には何の助けにもならない。哲學の眞理は自らの存在をそれに賭けることによつて獲得せられ、その實現はすべて一回限りのものであり代理不可能である。それ故にこの眞理は常に同時に人格的であり、私がそれに據つて生き得るところの眞理である。

然しながら、科學即ち有限なる知と、哲學即ち無知を通じて自由に到らしめる知とは、互に依存し合つてゐる。科學は哲學なくしては指導を缺き、その意義を失つて、空虚な知識の無制限の追求に陥り、哲學は科學なくしては跳躍板を有たず、明晰な知見に到り得ず、世界を失つてしまふのである。それ故生きた科學には隠れたる哲學的衝動がひそみ、それは直接外に表はれねば表はれぬだけ益々眞實で決定的なものである。しかして哲學には、科學的知識への熱情、即ち世界内の事物に對する限りなき知識を欲求するところの熱情があり、しかもかゝる知識欲は、存在・神及び私自らに向ふところの根源的知識欲に基づいてゐるのである。

それ故科學に於ける世界知の限界を求めるのは、懷疑的に世界知を放棄するためではなく、唯科學そのものによつてのみ具體的に實現され得る限界意識の中に、飛躍の機を得ようとするがためである。私が科學に於て探究可能な知識をひろく獲得すればするほど、私の自由の可能性はいよいよ明かとなる。科學は、哲學的衝動による指導を力強く受ければ受けるだけ、いよいよ根本的に、實質的なる方向へ導かれるのである。

この論文に示した僅かな事項は、哲學史上現代の精神的狀況を通じて始めて残りなく明かになつた問題、即ち哲學と科學との關係への問ひ、に關はるものである。この關係をば、兩者相互の區別並びに結合に於て、唯かりそめに考慮するのみでなく、人間存在そのものの中に偽りなく實現することこそ、我等の時代の精神的課題の一つであると思はれる。(野田又夫譯)